



## 巻 頭 言

静岡赤十字病院院長

小 川 潤

昨年の巻頭言で厳し目の言葉を寄せたせい、はたまた編集長の熱意の成果か、今年の研究報の内容を見て驚いた。なんと原著が9編（昨年2編）、症例報告が4編（昨年同数）投稿されているではないか。そもそも医師はこの類の原稿依頼には腰が重い。だのに原著の4編は医師によるものだ。症例報告に至ってはすべて医師からのものである。やればできるのではないか。前回も指摘したように“時間とは作り出すものだ”ということを投稿してくれた医師が示してくれた。今回はさらに前回を超えた企画がある。それは二つの特別寄稿だ（昨年1つ）。ひとつは30年来呼吸器疾患一筋に臨床にあたってきた志知部長の投稿、もうひとつは骨粗鬆症に関して医師、薬剤師、放射線技師がそれぞれの視点から論じるという企画である。志知部長の論文は後ほどゆっくり拜読することとして、あまり多くを語らなかった年長者の経験と知恵がどのように論文に反映しているのか、想像すると心が踊る。また骨粗鬆症という locomotive syndrome の原因疾患を医師、薬剤師、放射線技師が各々どのように捉えているのかを知るのとはとても興味深い。たいへん良い企画である。

あまたある医学雑誌は、ある非常に狭い範囲の読者を対象とするものが圧倒的に多い。最近では医療マネジメント学会など、汎職種が同じ題目を検討し合う会誌も散見する。その中で本誌の特徴は、各々の職種が1年を振り返って各々の業績を紹介し合い、幅広い読者層を想定していることである。医師向けの雑誌は診療科ごとに隔てられ、ひいては2階建、3階建のようにさらに細分化されている。たとえば言うならば、あちらこちらに小さいマニャックな広場ができて、門外漢を拒絶する、そんな雰囲気すら感じる。実際の医療の現場では職種を超えた横の繋がりが重視されている。本誌の価値とは日赤病院という広場内の連携や絆を自らに、そして外部に示していることである。この広場ではどの職種も平等に主張する権利があり、読んで批評する権利がある。もちろん医師は投稿経験が多いので広場のリーダーであるかもしれない。私の希望としては、医師が病院職員にアカデミック・マインドを呼び覚ますように牽引し続けてもらいたい。それが院内の風通しを良くし、囿らずも経営向上に繋がればこれ以上の喜びはない。以上の観点で、本号は全職員に医療人としての進むべき道を示した記念号と言えるであろう。